

# “To the Marriage Her Nurse is Privy”<sup>1)</sup> — *Romeo and Juliet* についての一考察 —

村上世津子\*

(平成11年10月31日受理)

## “To the Marriage Her Nurse is Privy” : A Study of *Romeo and Juliet* Setsuko MURAKAMI\*

When Friar Lawrence first appears in this play, he is a man of good will and reason. However, his image dwindles by the end of the play. In contrast, although Romeo and Juliet are immature at the beginning of the play, they grow through their trials and tribulations, and achieve an image of tragic hero at the end of the play: the audience are awe-struck when we see Juliet challenge Fate and consummate their marriage by stabbing herself and falling on Romeo's body. Quite different from the lovers, the Friar flinches from facing his full responsibility when he confesses the way he contributed to their death. Lawrence's words “to the marriage/ Her nurse is privy” shows his unconscious intention to place part of his responsibility on the nurse, and by the effect of contrast his human weakness heightens the heroic image of Romeo and Juliet at the end of the play.

key words: Friar Lawrence, Romeo, Juliet

### はじめに

*Romeo and Juliet* についての評価は主人公のRomeoとJulietは運命や偶然の犠牲者であると見なすもの<sup>2)</sup>から運命や偶然の要素を認めつつも、彼ら自身の中に悲劇の責任を見いだすもの<sup>3)</sup>へ移行しつつある。作品全体の評価の変遷に伴い、RomeoとJulietの結婚を執り行い、彼らの悲劇に大いに関与しているLawrence神父の評価も変化してきた。“they stumble that run fast” (II.iii.94)や “These violent delights have violent ends,/ And in their triumph die” (II.vi.9-10)などの有名なセリフで代表される「理性の人」あるいは、相思相愛なのに両家の確執故に結婚できないことを知ると、2人を結婚させ、ひいては両家を和解させるべく尽力する「善意の人」、さらには、追放の宣告を受けて悲嘆しているRomeoや、大公の近親者で青年貴族であるParisとの結婚を強要されて自暴自棄になっているJulietを慰めて希望を与える「良き相談相手」というのが従来のLawrence神父の評価であった。<sup>4)</sup>しかし、彼が秘密結婚を執り行ったことや、Capulet家の霊廟の中で目を覚ましたJulietが最も精神的な支えを必要とする時に警備の者の足音を聞き、怖じ気をなしてJulietを捨てて逃げる点や、JulietとParisの結婚を避けるために仮死状態を引き起こす薬を調合するのは前にRomeoとJulietの秘密結婚を執り行ったのがばれると恥だからではないかというLawrence神父の誠実さに懐疑的な見方も提起されてきている。<sup>5)</sup> 一体、Lawrence神父は「善意の人」、「理性の人」、「RomeoとJulietの良き相談相手」なのか、それとも近年一部の批評

---

\* 英文学 講師

家に指摘されてきているように問題をはらむ人物なのだろうか。Lawrence神父像はRomeoとJulietの悲劇をどのように照射しているのだろうか。本稿ではLawrence神父に焦点を合わせてRomeoとJulietの悲劇を考察したい。

## I

Lawrence神父が初めて登場するのは2幕3場である。薬草を摘みながらその効用について述べているところへRomeoが登場して、今日、仇敵のCapulet家の令嬢Julietと結婚させて欲しいと言う。Lawrence神父は、つい先程までRosalineに夢中になっていたのにあまりに突然のRomeoの心変わりを叱責するが、“this alliance may so prove/ To turn your household's rancour to pure love” (II.iii.91-92)かもしれないことに思い至り、彼らの結婚の手助けをすることを告げる。Romeoの心変わりを叱責し、Julietに対する愛が真面目なものかどうかを確かめた上で結婚を認め、結婚を認めた後もRomeoの性急さを諫めている点で、ここのLawrence神父は理性と分別の代表者であると言えよう。

次にLawrence神父が登場するのは結婚のためにRomeoとJulietがLawrence神父の庵を訪れる2幕6場である。この場面でも2幕3場に引き続き、観客のLawrence神父に対する評価の基調をなすのは「理性の人」である。Romeoの“Do thou but close our hands with holy words,/ Then love-devouring Death do what he dare,/ It is enough I may but call her mine” (II.vi.6-8)という言葉に対してLawrence神父は“these violent delights have violent ends”だから“love moderately, long love doth so” (II.vi.14)と諭す。しかしまだ萌芽とさえ呼べないかもしれないが、この場面で観客はLawrence神父の行為に対して最初の不信感を抱く。2幕6場は“So smile the heavens upon this holy act,/ That after-hour with sorrow chide us not” (II.vi.1-2)というLawrence神父の言葉で始まっている。2幕3場でLawrence神父は“For this alliance may so happy prove/ To turn your households' rancour to pure love”と言った。つまりRomeoとJulietの結婚は両家の確執による騒乱に苦しめられている市民にとっても福音になるだろうと考えていた。善行をしようとしているのに、何故神の「叱責」を恐れなければならないのか。RomeoとJulietの結婚式を執り行うことに何かやましいことがあるのか。

2幕3場のLawrence神父のセリフをもう一度考えてみよう。“may so happy prove”という言葉が付いているということは逆に言えば「うまく行かないこともある」ということである。Montague家とCapulet家の確執が続いているので、いつ何時事態が急変しても不思議ではない。そもそもこの劇はCapulet家とMontague家の下男達のつばぜり合いに端を発する両家の主を巻き込む騒動から始まった。そしてCapuletに止められはしたもの、RomeoがCapulet家の宴会に紛れ込んでいることに気づいたCapuletの甥でJulietの従兄であるTybaltはRomeoがCapulet家の者を辱めるためにやって来たと思い、復讐の機会を虎視眈々と狙っている。RomeoとJulietの年齢も問題である。<sup>6)</sup> Julietは14歳、正確に言えば後一週間で14歳になる13歳である。Romeoの年齢は不詳であるが、観客が最初にRomeoについて聞くのは開幕場面の騒乱の後で両親が息子を心配する言葉によってである。つまり、Romeoも自立した青年というよりも親に庇護された存在であることがまず観客に知らされる。一触即発の危険をはらんだ状況下でこんな未熟な者同士を親の承諾も得ずに簡単に

結婚させて良いのか。<sup>7)</sup> Lawrence神父が神の「叱責」に言及するのを聞いた時に、このような疑問が観客の脳裏をかすめる。

次にLawrence神父が登場するのは3幕3場である。Julietの従兄のTybaltを殺した後でRomeoはLawrence神父の庵を訪れる。この場面でRomeoは大公が「追放」の宣告を下したことを聞く。Romeoはその宣告を聞くとLawrence神父の忠告にも耳を貸さずに泣きわめく。この場面にはJulietの乳母も登場してRomeoと同様にJulietも泣きじゃくるばかりであると告げる。Julietの悲しみの元凶が自分であると思ったRomeoは短剣で自殺をしようとして乳母に剣をひったくられる。Lawrence神父はRomeoの自暴自棄を叱責して本来ならば死刑に処せられるはずであったのが追放に減刑されたのはいかに幸運なことであったかを諄々と諭した上で、折を見てRomeoとJulietの結婚を公にし、両家を和解させ、大公のお許しを願ってRomeoを呼び戻すことを約束してRomeoに希望を与える。RomeoとともにLawrence神父の説教を聞いた乳母が感激するように、ここでのLawrence神父の対応は聖職者の鏡と言えるほどの確である。

次にLawrence神父が登場するのは4幕1場である。かねてからCapuletにJulietとの結婚の許しをお願いしていたParisはついにCapuletの承諾を得たのみならず、結婚式の日取りまで決定したので、その旨をLawrence神父のところへ報告に行く。Parisの話聞いたLawrence神父はParisがJuliet本人の意向を確かめていないことと、あまりにも急なことを理由にその結婚に難色を示すが、ParisからJulietがTybaltの死を嘆き悲しんでいてとても結婚の話を持ち出せる状態でなかったから本人の承諾を得られなかった、そしてむしろそういう状態だからこそ“to stop the inundation of her tears” (IV.i.12)するためにも結婚を急いだ方がよいとCapuletが考えたと説明されて、既にRomeoとJulietを結婚させているLawrence神父は苦境に陥る。そこにJulietが登場し、ParisとLawrence神父の会話は中断され、JulietとParisの間で結婚をめぐる攻防戦が繰り広げられた後、Parisが退場し、JulietはLawrence神父にParisとの結婚を取りやめにする手だてを教えてくださいなれば短剣で自殺すると言って詰め寄る。Julietの剣幕にLawrence神父はJulietの決意と勇気確かめた上で仮死状態になる薬を渡して結婚式の前の晩にそれを飲むように指示する。Lawrence神父の計画では、朝になって花婿が迎えに来る時にはJulietはベッドで死んでいる（ように見える）のでParisとの結婚を回避することができ、代わりに晴れ着を着せられ棺台に載せられて先祖代々Capulet家の者が眠る古い霊廟へ運ばれる。その間、Lawrence神父はRomeoに手紙を出してことの次第を知らせておく。そして戻って来たRomeoとLawrence神父がJulietの目覚めを待ち、RomeoがJulietを連れてMantuaに行くという筋書きを作る。

Tybaltを殺した後でRomeoを慰め、元気づけた時のLawrence神父の対応と異なり、観客はここでのLawrence神父の対応に一種の胡散臭さを感じる。その理由の一つは飲むと仮死状態になる薬というのは何かsorceryを連想させるからである。しかしより重要なことは土壇場で回避するにしても、いったんはJuliet自身にParisの結婚申し込みを正式に受け入れさせる、しかも“be merry, give consent/ To marry Paris” (IV.i.89-90 強調筆者)と指示することである。100%結婚しないとわかっているのに求婚相手に本人が了承した旨を伝えさせるのはどうか。このやり方はParisの心を土足で踏みつけるようなものではないか。<sup>8)</sup>

観客が最初にParisのことを知るのは1幕3場でParisがJulietに求婚していることを

Capulet夫人が告げる時である。Capulet夫人はParisのことを立派な本にたとえているが、夫人の言葉を聞いた時に観客は立派な人物がJulietに求婚しているらしいと思うだけでParisに対してなんら親しみを覚えない。その後RomeoのTybalt殺しの後で3幕4場に登場してCapuletから娘をやる承諾を得た時にも観客はParisに好感を抱かない。それどころかJulietが悲嘆に暮れている時に結婚の話をするのは観客の神経を逆撫でするし、結婚の話が当人であるJuliet抜きで決定されていることでParisに反感さえ持つ。そして4幕1場のLawrence神父とParisとの会話では観客はParisなりの結婚に対する考え方を理解はできるが、まだ特に共感を抱くにはいたらない。しかし続いてのParisとJulietの会話では、観客にはJulietの気持ちが痛いほど分かるがParisが初めてJulietと向き合って彼なりに誠実に結婚の話をしているのにJulietが曖昧な返事しかしないので少しParisが哀れに思えてくる。観客の感情がParisに向かって大きく傾くのは、JulietがLawrence神父に渡された薬を飲んで仮死状態になっているのが発見されて霊廟に埋葬された後の5幕3場で、Parisが人知れずJulietの墓に手向いの花を撒き、Julietの死を悼み泣く姿を見る時である。

ParisはJulietと婚約はしていたけれども結婚はしていなかった。Julietの死によって結婚は寸前で回避されたのだからParisとJulietは結局は何のつながりもないままに終わった。だからJulietの死が発見された時に花婿になるはずであったParisがJulietの死を悼むのは当然としてもその後は結局は自分とは縁がない人物であったと思ひ、彼女のことを放念して、また自分にふさわしい新たな花嫁候補を探し始めても良かったはずである。しかしParisはそうせずにJulietの死後も彼女のことを思い続ける。“Put [thy torch] out, for I would not be seen” (V.iii.2)というParisの言葉はParisが見せかけのためにJulietの死を悼んでいるのではなく、本当に心からJulietを思う気持ちでやっていることを観客に印象づける。

ParisがJulietの死を悼んでいるところにMantuaから戻ってきたRomeoが登場して切り合いになり、ParisはRomeoに殺される。Parisの死に直接手を下したのはRomeoだがLawrence神父も間接的にParisの死に手を貸しているとは言えないか。Lawrence神父がJulietの偽装死を演出しなければRomeoの従者がJulietの死を知らせてRomeoがMantuaから戻ってくることはあり得なかったからRomeoがParisを殺すこともあり得なかったはずである。偽装死の演出はJulietの重婚を防ぐための唯一無比の方法だったのだろうか。いや、むしろ重婚を防ぐ正攻法はJulietが既にRomeoと結婚していることを告げることではないか。RomeoはMontague家の御曹司であり、しかもRomeoはCapuletの甥のTybaltを殺して大公から追放を宣告されたばかりであるから、親の承諾も得ずにそんな人物と勝手に結婚していたことを告白すれば親から勘当されることは必至であろう。<sup>9)</sup>そして「家」や「名前」が重きをなす社会では勘当が特別な重みを持つことはCookの指摘する通りである。<sup>10)</sup>しかしJulietは重婚を避けるためなら何でもすると言った。それならどうしてまずRomeoと一緒にすることと引き替えに父親から勘当されてさすらいの身になる覚悟をJulietに質し、CapuletにJulietは既にRomeoと結婚しているのでParisと結婚できないことを告げ、親に勘当されたJulietをMantuaのRomeoの許に連れていき、そこでの2人の生活を陰から援助することを考えないのか。

Petersonは、Julietの自殺を防ぐという目的が偽装死の演出という手段を正当化する、そして神父の計画が失敗に終わるのは手紙が届かなかったという偶然によるものなので神父

に過失はないと指摘している。<sup>11)</sup>なるほどPetersonの指摘するようにLawrence神父の計画はJulietの自殺を阻止した。そして彼の計画通りにことが運べばRomeoとJulietにとってだけでなくMontague家とCapulet家にとって、ひいてはVerona市全体にとって最善の結果が得られたであろうことを考慮すれば、Lawrence神父がJulietに仮死状態を引き起こす薬を渡すことが善意に基づいていることは確かであるように思える。しかし飲む直前にJulietが神父の計画通りにことが進まない様々な場合を想定して恐怖に囚われることが示唆しているように、神父の計画は非常に危険な賭である。Lawrence神父がここで正攻法を選ばずに敢えて危険な賭に出ている理由の一つはJulietが心配するように神父の心に無意識のうちにRomeoとJulietを極秘結婚させたことが知れたら大変な恥辱になるという恐れが巢喰い始めているからではないか。

この場面を境に観客の心はLawrence神父から離れていく。Julietの死の発見の場面で他の登場人物達が彼女の死を嘆き悲しんでいる時に、神父が滔々と説教する言葉はいかにも空々しい印象を観客に与える。しかし観客の心がLawrence神父から最も離れるのは5幕3場の霊廟の中でJulietが目を覚ました時にLawrence神父がJulietの心のケアを全くせずに“Come from that nest/ Of death, contagion, and unnatural sleep” (V.iii.151-2)と言って逃げることをすすめる、JulietがLawrence神父の誘いを拒否すると、彼女を残して自分一人逃げる時である。

Capulet家の霊廟の中でParisとRomeoの死体が発見され、既に死んでいたはずのJulietの死体がまだ暖かくて息を引き取ったばかりの様相を呈している事件が発覚した後でLawrence神父がRomeoとJulietが悲劇に至った経緯を説明する場面は、観客が既に知っていることの繰り返しだとして批判されたり、映画では割愛されたりすることが多い。<sup>12)</sup>しかし、この語りはLawrence神父像を考察する時に無視することができないものである。この語りについてGibbonsは“the Friar begins his expiation in the act of confession”と述べている。<sup>13)</sup>しかしここでのLawrence神父の語りは本当に贖罪につながる懺悔になっているだろうか。このセリフの終わり近くでLawrence神父は“to the marriage/ Her nurse is privy”と告げる。RomeoとJulietの結婚に乳母が関与しているのは事実である。それどころか乳母の骨折りがなければRomeoとJulietの結婚は成立し得なかったであろう。しかしここで神父が乳母の罪を暴き立てなければならぬ必然性があるだろうか。この一文がなくてもRomeoとJulietが死に至った理由は十分わかるのではないか。この劇の終わりで大公は“Some shall be pardoned, and some punished” (V.iii.308)と述べる。「許すべき者」が誰で「罰すべき者」が誰なのかは明確ではない。しかし、Lawrence神父の言葉を聞いた後で大公が“We still have known thee for a holy man” (V.iii.270)と言い、また、小姓が持っていたRomeoの手紙を読んで“*This letter doth make good the Friar's words, / Their course of love, the tidings of her death; And here he writes that he did buy a poison / Of a poor pothecary*” (V.iii.286-89)と言っていることから推測すれば「許されるべき者」はLawrence神父で「罰すべき者」は乳母と貧しい薬屋ではないかと思われる。<sup>14)</sup>だがLawrence神父の一言が乳母の有罪に貢献するならば、観客はやりきれない気持ちがする。Lawrence神父はカトリックのフランシスコ派の修道士であるが、カトリックの神父は信徒が告解室の中で話したことを他言してはならない。神父は神の子キリストの代理人であり、告解室で告白したこ

とは決して他言しないという大前提が崩されれば信徒は心の奥底の魂の叫びを赤裸々に告白することができなくなるからである。乳母がRomeoとJulietの結婚に関与していることをLawrence神父が知ったのは告解室で乳母が告解したからではない。しかし乳母はRomeoがTybaltを殺してRomeoとJulietの結婚生活に最初の重大な危機が訪れた時にLawrence神父の庵を尋ね、指導を仰いでいる。これは乳母がLawrence神父のことを徳高い神父なので他言される心配をすることなく何でも打ち明けられ、打ち明けたらきっと何か解決の手がかりを提示してくれるだろうと絶対的な信頼を寄せていたからではないか。そして事実、先に述べたようにLawrence神父の解決策を聞いた時に乳母はLawrence神父の学識に心から敬服する。ここまで自分を信頼し、頼っていた信徒の罪を容易に公言しても良いのだろうか。

大公の“Bring forth the parties of suspicion” (V.iii.222)という言葉に対して“I am the greatest. . . most suspected. . . of this direful murder” (V.iii.223-225)と答え、RomeoとJulietが死に至った経緯を説明するセリフの最後で“and if ought in this/ Miscarried by my fault, let my old life/ Be sacrificed, some hour before his time” (V.iii.266-268)と言っていることから判断すればLawrence神父は自分の行為が引き起こした結果の重大さを十分に認識しているように思われる。しかし自分の落ち度を認識しつつも、この期に及んでまだ、無意識のうちに逃げの姿勢 — Lawrence神父自身の言葉を用いるならば“purge...myself excused” (V.iii.226-227)したいという気持ち — が作用しているのではないか。

“To the marriage/ Her nurse is privy” というセリフがより一層問題なのはLawrence神父が、乳母がこの事件に関与している限界を明確にしていないことである。Julietに仮死状態を引き起こす薬を与える時に“go home be merry, give consent/ To marry Paris” することと、“look that thou lie alone,/ Let not the Nurse lie with thee in thy chamber” (IV.i.91-92)と指示したことには全く触れていないことである。Parisとの結婚を強要されたJulietが乳母に知恵を求めた時に彼女は重婚を薦めたが、その後JulietがLawrence神父の許へ行くことには賛成した。そしてJulietが晴れやかな顔をして戻ってきて結婚の承諾をした時には乳母は心から喜んでいて、深く突き詰めて考えることのできない無教養な乳母はおそらくJulietの晴れやかな態度を見て問題は解決したと思ったことだろう。もしLawrence神父が“to the marriage/ Her nurse is privy” というセリフの後に「ただし私は薬を与えるに際してJulietに家に戻ったら楽しそうに振る舞ってParisとの結婚を承諾することと、結婚の前の晩は乳母もおまへの寝室に寝かしてはならないことを指示しましたので、これ以降のことについては乳母の関知するところではありません」という言葉が付け加えられていれば聞き手の印象は違っていただろう。Lawrence神父が意図して乳母に責任を転嫁しているわけではないことは確かであるが、“to the marriage/ Her nurse is privy” とだけ言うことによって乳母に責任の一端を担ってもらい、自分の責任を軽減したいという保身的な気持ちが無意識のうちに出てきているのではないか。

以上議論してきたようにLawrence神父の行動を詳細にたどってみると、途中で多少の揺れ戻しはあるものの、観客のLawrence神父像は「理性の代表者」「善意の人」「RomeoとJulietの良き相談相手」といった理想的な人物像から時と場合によっては保身的な態度を取り得る人物へと縮小する。このLawrence神父像の変化は観客のRomeoとJuliet観にどのよ

うに作用するのであろうか。次項以降では観客のRomeoとJuliet像の変化について議論する。

## II

この劇で最初に登場する時からRomeoは恋人として登場する。RomeoはRosalineに恋をしていて、どんな美人を見ても “’Tis the way/To call hers (exquisite) in question more...thou canst not teach me to forget” (I.i.219-228)と豪語する。しかし岩崎が指摘するようにRosalineに対する憧れがペトラルカ的な肉体的現実を伴わない、観念的な恋でしかないことはRosalineへの思いを語るRomeoの言葉がペトラルカ風恋愛詩に特有の撞着矛盾と誇張法が多用されていることによって示唆されている<sup>15)</sup>：

...O brawling love, O loving hate,  
O any thing of nothing first create!  
O heavy lightness, serious vanity,  
Misshapen chaos of well-seeming forms,  
Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health,  
Still-waking sleep, that is not what it is! (I.i.167-172)

Rosalineへの恋は本物の恋ではなく、恋に恋しているに過ぎないからCapuletの宴会に潜り込んでJulietの姿を見かけたとたんRosalineのことを忘れてJulietに一目惚れする。そしてRosalineへの恋と異なりJulietへの愛が空疎な観念的な愛に終始していないことは、Capuletの宴会でRomeoとJulietが最初に交わす言葉が「遠くにいる女を思慕する男の一方的な愁訴でなく、愛し合う男女の対話であること、求愛が単に感情と思念の羅列でなく現実的行動を伴っていること、むしろ詩の言葉そのものが肉体的行動と結びついていること」<sup>16)</sup>によって示唆される。しかし他方ではJulietに一目惚れをした時のRomeoのセリフにはまだペトラルカ的な持つて回った比喻と誇張が用いられている：

O she doth teach the torches to burn bright!  
It seems she hangs upon the cheek of night  
As a rich jewel in an Ethiop's ear —  
Beauty too rich for use, for earth too dear:  
So shows a snowy dove trooping with crows,  
As yonder lady o'er her fellows shows. (I.v.43-48)

この持つて回った比喻的表現の多用は有名なバルコニーの場面でも引き継がれていて、バルコニーの場面ではJulietの率直な真情の吐露とRomeoの持つて回った表現の多用は鮮やかなコントラストをなしている。

バルコニーの場面で愛を確かめあった直後にRomeoはLawrence神父を訪れるが、この時にも結婚の話を持ち出す時に回りくどい表現をして、“Be plain...and homely in thy drift” (II.iii.55)とLawrence神父にたしなめられている。しかし劇の進展につれてRomeoの持つて回った表現は鳴りを潜め、徐々に率直な表現に移行していく。2幕6場で結婚式のために再度Lawrence神父を訪問した時のRomeoのセリフ、“come what sorrow can,/ It cannot countervail the exchange of joy/ That one short minute gives me in her sight” (II.vi.3-5)

は大言壮語ではあるが回りくどい表現ではない。とはいえ、Romeoの表現の変化は「持って回った言い方」から「率直な表現」へ一直線に進むわけではない。秘密結婚をしているので率直に答えにくいと言うことがあるにしても3幕1場で“*thou art a villain*” (III.i.54)と言ってTybaltにけんかを売られた時のRomeoの答えは回りくどい：

Tybalt, the reason that I have to love thee  
Doth much excuse the appertaining rage  
To such a greeting. (III.i.55-57)

I do protest I never injured thee,  
But love thee better than thou canst devise. (III.i.61-62)

RomeoとJulietの結婚を知っている観客にはRomeoの言いたいことがわかるがRomeoとJulietの結婚など夢にも思ったことのない者がRomeoのこの答えを聞くと、Mercutioのように“*O calm, dishonourable, vile submission!*” (III.i.66)と思うか、Tybaltのように馬鹿にされていると思ってより一層、闘争心を掻き立てられるかのいずれかであろう。はたしてMercutioはRomeoの代わりにTybaltの挑戦を受け、2人の間で決闘が始まり、止めに入ったRomeoの腕の下からTybaltに刺されて死ぬ。自分のせいでMercutioが殺されたことを痛恨するRomeoはMercutio殺しの恨みを果たすべくTybaltを切り殺すが、このTybalt殺しを契機にRomeoとJulietの運命は急転してRomeoとJulietは悲劇への道を歩み始める。Tybaltが倒れるのを見てRomeoの友人であるBenvolioが“*Stand not amazed, the Prince will doom thee death/ If thou art taken. Hence be gone, away*” (III.i.125-126)と言うのを聞いてRomeoは“*O, I am fortune's fool*” (III.i.127)と言う。RomeoとしてはJulietと結婚してTybaltとも親戚になったからTybaltにも縁者としての愛情を感じるし、Mercutioは前からの親友だから2人に争ってもらいたくなくて善意から止めに入ったのに、そのせいで自分の肩代わりをして挑戦を受けた親友が殺され、その親友の仇を討つと、大公の命令に背いたかどで厳罰に処せられるのみならず、結婚したばかりの妻をも悲しみのどん底に突き落とすことになるのはRomeoが“*I am fortune's fool*”と言うのも当然のような感じがする。しかしここでのRomeoは運命の慰みものに過ぎない存在だろうか。

Nevoは、RomeoのTybalt殺しは単なる性急さの産物どころか“*it is an action first avoided, then deliberately undertaken, as it is entirely expected of him by his society's code*”であると述べている。<sup>17)</sup> KahnはNevoの見解を支持し、その理由として、私たちはRomeoとJulietの愛の成育を望む一方でTybaltが罰せられMercutioの仇が討たれることを期待するからだと述べている。<sup>18)</sup> なるほどRomeoがTybalt殺しをするに至った背景は十二分に同情に値する。しかしだからといってRomeoの責任が軽減されるわけではない。開幕場面のMontague家とCapulet家の小競り合いの後で、大公が“*If ever you disturb our streets again, / Your lives shall pay the forfeit of the peace*” (I.i.87-88)と宣言していたのだからTybaltのMercutio殺しを大公に訴え出て大公にTybaltを公式に罰してもらおう選択もなかったわけではないからだ。さらには、Tybaltの決闘の挑戦に対するRomeoの持って回った応答がTybaltとMercutio双方にRomeoの真意を誤解させ、かえって2人の闘争心に火をつけた側面があることは否定できないからだ。RomeoとJulietの結婚は双方の両親にさえ隠して極



秘裏に行われた結婚であるからRomeoがTybaltの挑戦に応じられない理由を明確に述べられないことには無理からぬところがある。しかし“the reason that I have to love thee/ Doth much excuse the appertaining rage/ To such a greeting”という返答でTybaltが満足せず再度挑発してきた時に何故、「理由を説明するからLawrence神父のところに来て欲しい」という明確な返事をせずに曖昧な返事を繰り返すのだろうか。

Julietに恋をした後でもRomeoのありのままを率直に語らず大言壮語をしたり、持って回った表現をする癖が抜けていないことは既に指摘したとおりであるが、この癖はありのままの現実に直面し、自己の言動の責任を取る能力の欠如を示唆する。つまりJulietと恋に落ちた時にRomeoはJulietと一緒にいるために是非一刻も早く結婚式を挙げたい、そして式を挙げるためにはLawrence神父の助けが必要であるというところまでは考えつくが、宿敵の子供同士が双方の親にも内緒で極秘に式を挙げることの危険性など、まるで念頭にない。そもそも結婚に向かう行動さえ、JulietにRomeoの気持ちが本物で結婚を前提とした付き合いを考えているなら、明日あなたのところへ使いを出すから、いつ、どこで式を挙げるか返事をしてくれと言われて初めて起こしたのであった。Julietに結婚を示唆される前のRomeoは恋に舞い上がってしまって宿敵であるMontague家の御曹司が夜間にCapulet家に忍び込んでいるのが見つければ殺されるであろうという危険にすら気づいていない。それどころか恋に舞い上がるあまり、重力にさえ気づいていない：“With love's light wings did I o'erperch these walls,/ For stony limits cannot hold love out.” (II.ii.66-67)

結婚に向かう行動を開始してからは、これほど甚だしい現実逃避は見られないが式のために再度Lawrence神父の庵を訪れた時に言う“come what sorrow can,/ It cannot countervail the exchange of joy/ That one short minute gives me in her sight” (II.vi.3-5) というセリフは現実を認識する力が欠如していたからこそ言えたセリフであった。Tybaltから決闘の挑戦を受けた時に挑戦に応じられない理由を明確に述べることができないのも、Capulet家とMontague家がついこの間、一戦を交えたばかりで、大公の命令により休戦状態になってはいるが依然一触即発の緊張状態にあるということや、RomeoとJulietの結婚生活の維持のためには両家間の平和は欠かすことができないものであるという現実認識が欠如しているからではないのか。現実認識の甘さ故にRomeoは両家間の緊張を和らげるよりもむしろ、万一自分がJulietと結婚していることが親友のMercutioにかぎつけられたらどんなにかかわれるかが気になって明快な返事ができなかつたのではないか。<sup>19)</sup>それがMercutioの死によって一挙に厳しい現実を突きつけられる。その結果RomeoはMercutioの死という厳しい現実に圧倒されて、もう一つの現実、すなはちRomeoとJulietの結婚生活を維持するためには両家間の平和は欠かすことができないということと、大公が“If ever you disturb our streets again,/ Your lives shall pay the forfeit of the peace”と言っていたことを忘れてしまう。

MercutioがTybaltに刺されて深手を負った時にRomeoは“O sweet Juliet,/ Thy beauty hath made me effeminate” (III.i.104-105)と言った。勇気が危険や困難をものともせず突き進む精神であるならばTybaltの挑戦に応じて決闘することよりも、両家の平和を維持するためにTybaltの挑戦に応じられない理由を明確に述べることの方がはるかに勇気のいることではないか。そして自分の身代わりになったMercutioが死んだ時こそ“come what

sorrow can,/ It cannot countervail the exchange of joy/ That one short minute gives me in her sight” という言葉の真意が試されるがRomeoはMercutioの死という現実の重さに圧倒されてMercutioの仇を打つべくTybaltを殺して悲劇への一步を踏み出す。

Tybaltを殺した後でLawrence神父の庵を訪れて追放の宣告を聞いた時のRomeoの嘆き悲しみ方は全く女々しいものである。Tybalt殺しをするに至った背景は同情に値する点があるが自分のしでかしたことの重大さに直面し、罰を甘受しようとする気概もなければ、ましてや恋人に従兄を殺されたJulietの悲しみを思いやる余裕はないし、本来「死刑」に処せられるはずであったのを「追放」に減刑してくれた大公の「慈悲」に感謝する余裕はさらさらない。乳母からJulietもRomeoと同様に泣きわめいていることを聞いたRomeoは “In what vile part of anatomy/ Doth my name lodge? Tell me, that I may sack/ The hateful mansion” (III.iii.106-108) と言って自殺しようとして乳母に剣をひたられるが、彼の言葉と裏腹にここで自殺を企てることは男らしさの対極にある自暴自棄である。自殺は神に対する冒瀆であることに加えて恋人に従兄を殺され、深い悲しみに突き落とされているJulietに一番必要なものは精神的な支えなのに、ここで恋人までが自殺することは彼女をより一層追いつめるだけだからである。しかし、ここで自殺を企てようとする時がRomeoの像が一番縮小している地点であり、この後Romeoの像は拡大していく。Romeoが追放を甘受してMantuaで生き延びるなら折を見てRomeoとJulietの結婚を公にし、両家を和解させ大公のお許しを願っておまえを呼び戻すことにしよう、とLawrence神父が語るのを聞いて、この期に及んでまだ尚、希望が残っていることを知ると、Romeoは追放という厳しい現実を受け入れる。Lawrence神父の希望あふれる言葉を聞いた後のRomeoの率直かつ、平明な言葉はそれまでの持って回った比喩表現や大言壮語とコントラストをなし、現実と対峙しようとするRomeoの姿勢を反映している：

Do so, and bid my sweet prepare to chide. (III.iii.162)

How well my comfort is revived by this. (III.iii.165)

But that a joy past joy calls out on me,  
It were a grief, so brief to part with thee: (III.iii.173-174)

Lawrence神父の庵を後にしたRomeoはかねてからの約束通りJulietの許に行く。2幕2場のバルコニーの場面ではより現実的な対応をしていたのはJulietだったのに、Mantuaに発つ前にRomeoがJulietと束の間の逢瀬を楽しむ3幕5場ではRomeoの方がより現実に即した対応をしている。雲雀のさえずりを雲雀のさえずりと認識し、朝日を朝日と認識するのはRomeoの方でRomeoとの束の間の逢瀬を引き延ばしたいという意識が勝っているJulietには雲雀のさえずりはナイチンゲールの声に、朝日は “some meteor that the sun exhaled” (III.v.13) に感じられる。自らもできるだけ長くJulietと一緒にいたいと思うRomeoは “let me be put to death,/ I am content, so thou wilt have it so” (III.v.17-18) と言う。Romeoが死を口にするのはここが始めてではなく、既にバルコニーの場面で “My life were better ended by their hate,/ Than death prorogued, wanting of thy love” (II.ii.77-78) と言ってい

たし, Lawrence神父の庵で追放の宣告を聞いた時には自殺を企てようとした。しかしここで Romeoが死を口にするのは, そのいずれとも意味するところが異なっている。バルコニーの場面では言葉が一人歩きして実体が伴っていなかったし, Lawrence神父の庵で自殺を企てようとするのは “hath more terror in his look,/ Much more than death” (III.iii.13-14) である追放という厳しい現実から逃避しようとする行為であった。それに対して追放の身という現実を受け入れ, 見つければ本当に殺されることをしっかりと自覚した上で “let me be put to death,/ I am content, so thou wilt have it so” という時の Romeoにはまだ死ぬ覚悟まではできてはいないものの, この言葉には真情がこもっている。

次に Romeoが登場するのは Mantua に着いてからである。楽しい夢を見て幸せな気分になっているところに従者の Balthasar が登場し Juliet の死を告げると Romeo は即座に Juliet と一緒にいるための行動を起こす。ここで観客は今まで議論してきたようなセリフの変化に気づくよりも Romeo の行動の変化に気づかされる。結婚に至るまでの行動は Juliet に, そして Tybalt を殺して追放の宣告を受けた後の身の処し方は Lawrence 神父に, というように Romeo はこれまで他者に処方された通りに行動をしてきたただけであった。しかしここで Juliet の死を聞いた時に初めて自ら, しかも迅速に, 行動する。Romeo は Balthasar に Lawrence 神父からの手紙の有無を確認するだけで最早, 神父に助けを求めようとはしない。さらには Romeo はこれまで Juliet が Capulet の令嬢であることを知った時には “my life is my foe's debt” (I.v.117) と言い, Mercutio 殺しをした後では “I am fortune's fool” と言って不運な星回りを嘆いてきたが, ここでは最早, 運命に対して泣き言を言わず, 運命に真っ向から戦いを挑む: “Is it e'en so? then I defy you, stars!” (V.i.24 強調筆者) Capulet 家の霊廟に葬られている Juliet の許に駆けつけ, 毒薬を飲み, 彼自身も Juliet の後を追って死んで Juliet と一緒にすることによって自分から Juliet を奪った死神から Juliet を奪い返そうとする Romeo の断固たる決意の前では休日で薬屋が閉まっているとか, Mantua の法律では毒薬を売った者は死刑になるとか, Juliet の墓のそばに Paris がいたということは Romeo の行動を阻止する原動力足り得ない。そのような障害をものともせず Juliet の許に駆けつけ, ひとしきり彼女の美しさを愛でた後でいよいよ毒薬を飲む。

*Romeo and Juliet* の Prologue の中で Chorus は “The fearful passage of their death-mark'd love,/ And the continuance of their parents' rage,/ Which, but their children's end, nought could remove,/ Is now the two hours traffic of our stage” (9-12) と言う。“star-crossed lovers” (Prologue 6) や “misadventur'd piteous overthrows” (Prologue 7) という表現との関連でこの “death-mark'd” は「死に刻印された」と解釈されるきらいがあった。そしてそれ故 Romeo と Juliet は運命の哀れな犠牲者という印象が強かったが, Mahood が指摘しているように “death marked” という言葉は “marked out for death; foredoomed” というだけではなく, Sonnet 116 の “ever fixed mark” や “sea-mark of Othello's utmost sail” で用いられている “mark” との関連から “with death as their objective” をも意味しうる。<sup>20)</sup> 薬屋から毒薬を受け取った時に Romeo は “Come, cordial and not poison, go with me/ To Juliet's grave” (V.i.85-86) と言う。そして又 Mahood が指摘しているように, 毒薬をあおったときの Romeo のセリフ “Thy drugs are quick” の “quick” には “speedy” だけでなく “life-giving” の意味もあるので Romeo と Juliet は “cease to die, by

dying” するとも考えられる。<sup>21)</sup> 死をもたらす毒薬が何故「生」を持たらし得るのか。それはRomeoにとってはJulietこそが命の源泉であり、Julietの墓で毒薬を飲み、死んでJulietと一緒にすることは、死して生きることを意味するからである。Lawrence神父の庵で自殺を企てた時と異なり、ここで毒をあおるのは自暴自棄ではなく、死んで恋人と一緒にすることによって、彼から恋人を奪った（ようにRomeoに思えた）死神から恋人を取り戻そうとする勇猛果敢な行為である。

以上検討してきたようにLawrence神父の像がだんだん縮小していくのに反してRomeoの像はLawrence神父の庵で自殺を企てようとした時に最も縮小するものの、その後は一貫して拡大していくことがわかる。次項ではJuliet像の変化を検討し、Lawrence神父像の縮小がRomeoとJuliet像に与える作用について考察したい。

### III

この劇に登場する時にJulietは14歳にもならない小娘である。しかしIrene Dashを代表とする批評家が指摘しているように、RomeoよりもJulietの方がはるかにしっかりしている。<sup>22)</sup> たとえば、既に述べたようにバルコニーの場面で結婚に向かう具体的な行動を提案したり、恋で舞い上がっているRomeoに見つかれば殺される危険があることを思い出させたり、より現実に対応をするのはJulietの方であった。とは言え、“Romeo, doff thy name, / And for thy name, which is no part of thee, / Take all myself” (II.ii.47-49)という独白<sup>23)</sup>が示唆しているように、Romeoと恋に落ちた直後のJulietには現実から過酷さを取り除き、甘さだけを味わいたいという甘えがある。

この劇の中でJulietは試練を経るごとに成長して行くが、観客が最初にJulietの成長に気づかされるのは夫になったばかりのRomeoが彼女の従兄を殺して追放を宣告されたことを彼女が知る時である。Romeoが彼女の従兄を殺したことを乳母から聞かされた直後は“O serpent heart, hid with a flow'ring face!” (III.ii.73)と言ってRomeoをののしった。しかし乳母がより辛らつな言葉でRomeoを罵倒すると、Julietは乳母を非難し、Romeoの弁護をする。そして乳母に“Will you speak well of him that killed your cousin?” (III.ii.96)と聞かれると“Shall I speak ill of him that is my husband?” (III.ii.97)と言い返す。自分の従兄を殺されて、なおかつ必死になって夫を愛し続けようとするJulietの態度は、自分の身代わりになってMercutioがTybaltに刺された時に、まず自分の名誉が汚されたことを気にして、次に、自分の勇気の欠如の責任をJulietに転嫁しようとしたRomeoの態度と対照的である：

This gentleman, the Prince's near ally,  
My very friend, hath got this mortal hurt  
In my behalf; my reputation stained  
With Tybalt's slander — Tybalt, that an hour  
Hath been my cousin. O sweet Juliet,  
Thy beauty hath made me effeminate,  
And in my temper softened valour's steel! (III.i.100-106)

しかしJulietにはRomeo追放よりも大きな試練が待っていた。Julietの悲嘆をTybaltが殺されたからだと思っただ両親は頑なになっている彼女の心を嬉しい話でほぐすためにParis

との結婚を強要する。Romeoとの結婚は両親にも内緒の極秘結婚であるのに加えて夫となったRomeoは追放の宣告を受けたばかりで、しかもその理由が彼女の従兄であるCapulet家の者を殺したからとあっては、さしもの彼女にもなすすべがない。Parisとの結婚の話に「ありがたいけど、ありがたくない」と答えることができるだけである。今までJulietの言葉は率直なのが特徴であった。しかしここで理由を明確に述べることのできないJulietはCapuletの「骨折り」に対して「へ理屈」をこねた答えをしてより一層Capuletを怒らせる：

Not proud you have, but thankful that you have:  
Proud can I never be of what I hate,  
But thankful even for hate that is meant love. (III.v.146-148)

この答え方はTybaltに決闘の挑戦を受けた時のRomeoの煮えきらない断り方に似ている。違うのはRomeoが煮えきらない返事をしている時には彼の立場を知っている人は存在せず、彼の友達のMercutioがRomeoの名誉を守るためにTybaltの挑戦に応じたことが結果として逆にRomeoに悲劇の道を歩ませるきっかけとなるのに対して、ここではJulietがParisとの結婚を受け入れられないことを知っている乳母がいることである。ただし乳母はCapuletの理性を欠いた怒りを非難する言葉を口にするだけで何等Julietの助けにはならない。それどころかJulietの父母が退場して乳母と2人だけになった時にJulietがどうすればParisとの結婚を阻止できるかと相談すればRomeoとの結婚の取り持ち役をした乳母までが“Romeo is banished, and all the world to nothing/ That he dares n'er come back to challenge you” (III.v.213-214)であることを理由に、Parisとの結婚を勧める。

Romeoに比してJulietがいかにしっかりしているにしても、彼女はまだ年端もいかない世間知らずの深窓の令嬢であり、彼女を支えてくれる存在を必要としていた。Romeoとの恋を一夜限りの恋に終わらせずに結婚に発展させることを提案したのはJulietであったが、乳母の助けなしにはRomeoとの結婚は成立し得なかった。又Romeoが従兄のTybaltを殺し追放になったことを知って泣き崩れるJulietのためにLawrence神父の庵を訪ねて解決策を教示してもらってきたのも乳母であった。しかし乳母もParisとの結婚を支持していることを知った時にJulietは“Thou and my bosom henceforth shall be twain” (III.v.240)することを決意し、彼女自らLawrence神父の庵を訪ねて救いを求める。Lawrence神父からParisとの結婚を避ける唯一の手段として仮死状態になる薬をもらって帰ったJulietは薬が効かなかつたらどうなるかとか、その薬は本当は毒薬なのではとか、Romeoが迎えに来る前に目を覚まして、埋葬されているご先祖の骨や経帷子にくるまれて腐りかけている血塗れのTybaltやおぞましい臭いや悲鳴などの気味の悪い恐ろしいものに取り囲まれていたら発狂するのではないかという様々な恐怖に打ち勝ち、薬を飲む。ここで重要なことは彼女が1人で恐怖と戦うことである。もしそばに乳母がいてRomeoの追放の宣告を聞いた時のように彼女を慰めてくれたなら、あるいは彼女に薬を処方した神父が見守る中で薬を飲むことができたなら、彼女の不安は半減されたかもしれない。誰の助けも得ずに1人でこの難局を乗り切るところに観客は彼女の勇気と成長を見ることができる。

Capulet家の霊廟に埋葬されたJulietが目を覚ますのは5幕3場である。Romeoが迎えに来る前に目を覚まして、霊廟独特の恐ろしいものに取り囲まれていたら発狂するのではない

かという彼女が薬を飲む前に抱いていた不安は、目覚めた時に彼女の傍らにLawrence神父がいることでひとまず解消される。しかし“A greater power than we can contradict”(V.iii.153)がLawrence神父の計画を阻んだ。“Where is my lord?”(V.iii.148)というJulietの一番知りたかった問いに対する答えは“Thy husband in thy bosom there lies dead”(V.iii.155)である。最悪の答えしか与えられないLawrence神父ではあるが、一応はJulietの今後の身の振り方を心配して“I’ll dispose of thee/ Among a sisterhood of holy nuns”(V.iii.156-157)と言う。その上で，“Stay not to question, for the Watch is coming/ Come go, good Juliet, I dare no longer stay”(V.iii.158-159)と言って彼と一緒に逃げることを提案する。しかし、Julietは“Go get thee hence, for I will not away”(V.iii.160)と言って神父の誘いをきっぱりと断り、1人霊廟に留まる。そしてRomeoの杯に気づくと彼が飲み残した毒で後を追おうとするがRomeoがすっかり飲み干していてそれも叶わぬことを知る。そうこうするうちに奥で人声がするのを聞くと、自分の行為を他者に邪魔されないように急いで短剣で胸を刺して、Romeoの体に倒れかかり、死ぬ。

後に事件の真相究明の場面でLawrence神父は“she too desperate would not go with me,/ But as it seems, did violence on herself”(V.iii.263-264)と述べる。自殺を神の恩寵の絶望と見なすキリスト教的な見方からすればJulietの自殺は絶望の結果と思えるかもしれない。実際、JulietがLawrence神父の庵を訪れParisとの結婚を取りやめにする手だてを教えてくれなければ短剣で自殺すると迫った時に彼女がほのめかした自殺は絶望と自暴自棄の行為の代名詞であった。しかし5幕3場の自殺は自暴自棄でもなければ単なる敗北でもない。彼女がLawrence神父の誘いを断るのは従者からJulietの死を聞いた時のRomeoの態度に呼応する運命に対する挑戦である。運命がRomeoに死を与え、彼女には生を与えることで2人の仲を引き裂こうとするならば、彼女自身が死を選ぶことによって運命のもくろみを克服し、死ぬことによってRomeoと結ばれようとする壮絶な試みである。結婚式の前の晩に仮死状態を引き起こす薬を飲む時にもJulietには多大な勇気が必要であったが、最後にはLawrence神父は徳が高いので神父様のおっしゃった通りにすれば万事うまくいくに違いないという信頼感が彼女の勇気を支えた。しかし、ここで逃げようと言う神父の誘いを拒否することによって、彼女は最後の心の拠り所を捨て去る。完全に1人になった時にJulietは最早現実から過酷さを取り除こうとはせず、過酷さそのものに真っ向から挑戦する。Mahoodは先に引用したPrologueの“The fearful passage of their death-mark’d love”の“fearful”についても2つの意味があると述べ、“frightened”という意味に取れば恋人達は無力な存在になるが“fearsome”という意味に取れば私たちが彼らの行為に畏怖の念を覚えることになる」と述べている。<sup>24)</sup> Julietは“O happy dagger,/ This is thy sheath/ there rust, and let me die”(V.iii.169-170)と言って彼女の胸に短剣を突き刺し、Romeoの上に倒れかかって死ぬが、今西が指摘するように「『短剣』が男性性器のシンボル、『鞘』が女性性器を、又『死』が性的なエクスタシス・・・[を意味するから]・・・剣を胸に突き立て、折り重なって死ぬとき、今度こそ本当に2人の合一は完成し、2人の婚礼の秘儀は成就した」<sup>25)</sup>ということになる。RomeoとJulietの恋が純愛にも関わらず、2人の死で終わることに思っていた時に私たちは彼らの運命を哀れに思うが、彼らの死は彼ら自身が選び取ったものであり、運命に挑戦し、死ぬことによって婚礼の秘儀を完成させたことに思っていた時に私たちは彼らの所

業に畏怖の念を覚える。

Lawrence神父がRomeoとJulietの死の壮絶果敢なる運命への挑戦と勝利としての側面を理解できず、絶望の所産としか考えられないのは、Lawrence神父がこの劇の最後で彼がRomeoとJulietの死に関与した役割を告白する時でさえ、できるならば許されたいという逃げの気持ちを完全には克服できないことと関係があるのではないか。もちろん神父といえども人の子であるから、できるならば許されたいという気持ちが働くのは自然なことであり、自分の責任を認めるとともに自分の責任とは言えない部分——偶然の作用や乳母にも責任があること——について弁明したいと思うのは当然かも知れない。しかし、自分たちは運命の犠牲者であり、何とかして過酷な運命から逃れたいと思ってきたRomeoとJulietは、この劇の終わりで、恋人が死んで失うものがなくなったと感じた時には、最早、現実から逃避しようとはしないし、運命の過酷さについて何等弁明しようともせず、1人で運命に真っ向から挑戦する。聖職者であり、しかも理性と徳の高さの体現者であると思われていた神父でさえ克服できない弱さを、未熟に見えたRomeoとJulietが克服してみせる。この劇の終わりでLawrence神父が露呈する人間的な弱さは対比の効果によってRomeoとJulietが獲得した壮絶な勇気を鮮明に浮き上がらせ、観客の脳裏に悲劇の英雄像を焼き付ける。

### 結び

この劇の中でLawrence神父は最初はRomeoとJulietの良き相談相手で善意と理性を代表する人物として登場するが、この劇の終わりではLawrence神父像は縮小する。それに対してRomeoとJulietはこの劇に登場する時には若さ故の未熟さを露呈しているが試練を経る度に成長していき、この劇の最後では運命に果敢に挑戦する悲劇の英雄像を獲得する。Julietが“O happy dagger, / This is thy sheath; there rust, and let me die”と言って彼女の胸に短剣を突き刺しRomeoの上に倒れかかって死ぬことによって観客に畏怖の念を引き起こした後でLawrence神父が“to the marriage / Her nurse is privy”と言って無意識のうちに責任の一端を乳母に転嫁しようとする人間的な弱さを露呈する時に、観客はこの劇の始めと終わりでLawrence神父の像とRomeoとJulietの像が完全に逆転したことに気づかされる。Lawrence神父はこの劇の中でRomeoとJulietの成長の尺度となると同時にコントラストの効果によってRomeoとJulietの悲劇の英雄像を増幅する働きをすと言えよう。

### 注

1) William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, ed. G. Blakemore Evans, The New Cambridge Shakespeare (1984; Cambridge: Cambridge UP, 1989) V.iii.265-266. 以下、*Romeo and Juliet*からの引用はすべてこの版により本文中に幕場、行を記す。

2) H.B. Charlton, *Shakespearian Tragedy* (Cambridge: Cambridge UP, 1948) 52.

G.B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies* (London: Routledge and Kegan Paul, 1951) 48.

T.J.B. Spencer, introduction, *Romeo and Juliet*, by William Shakespeare (Harmondsworth: Penguin Books, 1967) 22.

3) Franklin M. Dickey, *Not Wisely but too Well: Shakespeare's Love Tragedies* (San Marino: Huntington Library, 1957) 114.

Brian Gibbons, introduction, *Romeo and Juliet*, by William Shakespeare, The Arden Shakespeare (1980; London: Routledge, 1992) 71.

Northrop Frye, *Northrop Frye on Shakespeare*, ed. Robert Sandler (New Haven: Yale UP, 1986) 24.

4) Dickey 115.

Douglas L. Peterson, “*Romeo and Juliet* and the Art of Moral Navigation” *Romeo and Juliet: Critical Essays* (New York: Garland, 1993) 312-315.

J. A. Bryant, Jr., introduction, *The Tragedy of Romeo and Juliet* The Complete Signet Classic Shakespeare (1963; New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1972) 482.

5) Lawrence 神父に対して最も厳しい見方をしているのは James C. Bryant であり, Lawrence のことを “appears not wise but impulsive, meddling in secular love affairs, deceitful to Juliet's parents, an equivocator, an instigator of prevarication, and apparently unfaithful to his canonical vows” と述べている。

James C. Bryant, “The Problematic Friar in *Romeo and Juliet*” *Romeo and Juliet: Critical Essays* 332.

最近の *Romeo and Juliet* の編者は Bryant の Lawrence 観を一部認めている。たとえば New Cambridge の編者の Evans は基本的には Lawrence 神父は善意を意図していると考えているが, Shakespeare は筋の必要上, Lawrence 神父を犠牲にせざるを得なかったと述べてつても, Romeo と Juliet の秘密結婚を執り行うことが危険を考慮しない性急なものであることや, Juliet と Paris の差し迫った結婚を阻止するために仮死状態を引き起こす薬を処方することはいかがわしいごまかしでその場を取り繕うと見えることや, 最後の場面で Juliet が最も精神的な支えを必要としている時に彼女を 1 人残して逃げることは Lawrence 神父の性格に潜在的な弱さがあるように見えることを認めている。(Evans 23-25) 又, 大修館シェイクスピア双書の編者の岩崎は 2 幕 3 場で薬草について語る Lawrence 神父のセリフは「単純, 気さく, 善意の人ではあるが, 自分に他人の運命を左右する力があると思いたがる」神父の性格を観客に印象づけると指摘している。(岩崎宗治, 大修館シェイクスピア双書『ロミオとジュリエット』の後注, 1998年 310頁) 岩崎はさらに, 5 幕 3 場の Capulet 家の霊廟の中で警備の者の足音を聞いて “I dare no longer stay” という時の Lawrence 神父のうろたえぶりは Juliet の落ちつきと対照的であることを指摘している。(岩崎 大修館シェイクスピア双書の注 285頁)

6) Roberts は近代初期のイギリスでは男性は 20 代後半, 女性は 20 代前半で幾分かの経済的な安定と自立を達成してから結婚するのが普通であったと指摘している。Roberts は又, 思春期は性急さや反抗や情欲や恋に溺れることを連想したことからも Romeo と Juliet の若さを問題視している。

Sasha Roberts, *William Shakespeare: Romeo and Juliet* Writers and their Work (Plymouth: Northcote, 1998) 14-17.

7) Hopkins は *Romeo and Juliet* や *Measure for Measure* の中に見られるような秘密結婚はまさに Tudor 朝が追放したいと思っていたものだったと指摘している。

Lisa Hopkins, *The Shakespearean Marriage: Merry Wives and Heavy Husbands* (London: Macmillan 1998) 45.

8) Lawrence 神父の計画が失敗したのは手紙を託した John 修道士が足止めを食ったからである。しかし当初木曜に予定されていた Juliet と Paris の結婚は「懺悔」から戻って来た Juliet が嬉しそうな顔をして結婚を了承したので Capulet が予定を一日早めた。このことは観客にもし Lawrence 神父が “be merry, give consent/ To marry Paris” という指示をしていなければ, あるいは手紙が間にあったかも知れないという印象を抱かせる。

9) 実際, Juliet が Paris との結婚を受けられないと告げた時に Capulet は “And you be mine, I'll give you to my friend;/ And you be not, hang, beg, starve, die in the streets,/ For by



my soul, I'll ne'er acknowledge thee” (III.v.191-193) と言う。

10) Anne Jennalie Cook, *Making a Match: Courtship in Shakespeare and his Society* (Princeton: Princeton UP, 1991) 101.

11) Peterson 316.

12) Stanley Wells, “Challenges of *Romeo and Juliet*,” *Shakespeare Survey* 49 (1996): 6.

13) Gibbons 76.

14) Shakespeare の *Romeo and Juliet* の材源である Arthur Brooke の *The Tragicall Historie of Romeus and Juliet* の中では Juliet の乳母は “banisht” で薬屋は “high is hanged by the throte” で Lawrence 神父は “discharged quyte” である。

Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, 8 vols. (London: Routledge and Kegan Paul, 1957) 1: 362-3.

15) 岩崎宗治 『シェイクスピアのイコノロジー』三省堂 1994年, 46頁

16) 岩崎 『シェイクスピアのイコノロジー』43頁

17) Ruth Nevo, *Tragic Form in Shakespeare* (Princeton: Princeton UP, 1972) 46.

18) Coppelia Kahn, “Coming of Age in Verona,” *Romeo and Juliet: Critical Essays* 341.

19) Novy は, Romeo が Mercutio に Juliet への恋を打ち明けないのは Juliet への恋は家制度への挑戦であるだけでなく, 男らしさの概念への挑戦でもあるからだと述べている。

Marianne Novy, “Violence, Love, and Gender in *Romeo and Juliet*,” *Romeo and Juliet: Critical Essays* 365.

20) M.M. Mahood, “Wordplay in *Romeo and Juliet*,” *Shakespeare's Tragedies: An Anthology of Modern Criticism*, ed. Laurence Lerner (1968; Middlesex: Penguin, 1984) 17.

21) Mahood 32.

22) Irene G. Dash, *Woing, Wedding, and Power* (New York: Columbia UP, 1981) 98.

23) Levin は, Juliet のセリフは Romeo の名前だけを問題にしているのではなく, “all names, conventions, sophistications, and arbitrary dictates of society, as opposed to the appeal of instinct directly conveyed in the order of a rose” を問題にしていると言っている。Harry Levin, *Shakespeare and the Revolution of the Times* (New York: Oxford UP, 1976) 105.

又, Berry は, 名前は社会の価値観を記号化したものだと言っている。

Ralph Berry, *Tragic Instance: The Sequence of Shakespeare's Tragedies* (Newark: U of Delaware P, 1999) 69.

24) Mahood 17.

25) 今西雅章 『陰翳と変容のドラマ—シェイクスピアの喜劇と悲劇』研究社 1991年 203頁